

谷崎潤一郎全集逸文紹介 3

細 江 光

昨年、私は、『甲南国文』（第38号）と『甲南女子大
学・研究紀要』（第27号）に『谷崎潤一郎全集逸文紹
介1・2』を掲載したが、その後、新たに数点を発見
したので、この場を借りて翻刻させて頂く事にした。
なお翻刻の際、本文には一切手を加えなかった。

1. 『遊ばせ言葉』を廢止すべし』

「婦人公論」大正十四年三月号「公論」欄

「遊ばせ言葉」に対する嫌悪は、昭和四年の『関西
の女を語る』や昭和七年の『私の見た大阪及び大阪

人』でも語られており、そこでは東京を嫌う理由の一
つに挙げられている。また、男言葉と女言葉の区別
については、昭和四年の『現代口語文の欠点について』
や昭和九年の『文章読本』でも、日本語の長所として
挙げられている。

「遊ばせ言葉」を廢止すべし

谷 崎 潤 一 郎

およ 凡そ今日實際に用ゐられる日本語の語法のうちで、
あそ 「遊ばせ言葉」と云ふものぐらゐ不愉快なものはない

やうに思ふ。大阪辯、京都辯、仙臺辯、秋田辯、などと云ふやうな方言には、野卑なところやおどけたところがあるにはあるが、聞き馴れて見ると皆それぞれに言葉としての美しさがある。然るに「遊ばせ言葉」と云ふのは、方言ではなくて一種の階級語なのである。貴族趣味、山の手趣味、若しくは上流家庭趣味を現はすところの一種の符牒なのである。私は何も階級語だから、貴族趣味だから悪いと一概にケナスのではない。貴族趣味でもそれがいい趣味であるならば保存して置く方がよいし、平民もそれを學ぶべきである。が、どう考へても「遊ばせ言葉」には變なイヤ味があるばかりで言葉としての美しさが無い。第一完全な「遊ばせ言葉」で細かい事柄を一から十まで述べようとすると非常に云ひ廻しが億劫で耳觸りが悪くなる。たとへば「何々遊ばしましたらば、何々遊ばしましたものでございますから、何々遊ばしたのでございます」と云ふやうになつては厄介至極である。「お出で遊ばせ」と云ふ代りに「お出でなさいまし」と云つたらそれで澤山ではないか。若し西洋の戯曲や小説など

にある貴族の婦人たちの會話を、「遊ばせ言葉」で譯すとしたらどうなるだらう。結局面倒で譯し切れなくなりはいないか。私なんかは下町の町人の子で眞似ようと思つても眞似られないが、たまたま山の手の夫人、令嬢、小間遣ひなどが使つてゐるのを聞いてゐても、少し話が込み入ると矢張り云ひ難さうである。そして自然な、すらすらとした、なだらかな感じが無い。さうかと云つて決して上品な氣も起らない。妙に冷たい、わざとらしい心持ちがするばかりである。

尤も此れが眞に上流の家庭でばかり使はれてゐるなら、さして氣になる問題ではないが、近頃の女學校の生徒たちは大概これを使ふやうである。貧乏人の娘でも下町の町家の娘でも、女學校へ通ひ出すといつの間にか「遊ばせ言葉」を覺え込んで、學校内では勿論のこと、友達の間でも、自分の家へ歸つて來ても「遊ばせ」が出る。中には娘の言葉つかひが丁寧になつた、これも女學校へ行つたお蔭だと喜んでゐる親たちもある。「遊ばせ言葉」を器用に使ひ得ることが、「私は女學生生活をしたものです」と云ふ一つの

見えにさへなつてしまつてゐる。此の工合だと女子教育が發達するに従つて、「遊ばせ言葉」はいよいよ蔓延するかも知れない。

西洋の言葉には人稱代名詞に性の區別はあるけれど、男が口で話す言葉と、女が口で話す言葉とはその云ひ廻しが同じである。「私は知らない」と云ふ場合に男でも女でも「アイ、ドント、ノー」と云ふが、日本では大槪の場合、男と女と云ひ方が違ふ。女だつたら「存じませんわ」とか、「知らなくつてよ」とか、「あたし知らないわ」とか、兎に角女でなければ使はない言葉を使ふ。だから日本の小説中に出て来る會話はそれが男の言葉だか女の言葉だか、一見して直ちに分る。此れは日本語の特長であつて、女が女らしい優しい言葉を使ふのは非常に結構なことではあるが、その優しさも程度問題である。優しさが過ぎて馬鹿丁寧になり、生き生きとした気分や感情が現はれないほど不自然になつては、沙汰の限りである。殊に新時代の思潮の中に生きんとする女學生たちが、封建時代の遺物である「遊ばせ言葉」を使ふ必要が何處に

あらう。思ふに女學校の先生たちは、「遊ばせ言葉」を以て禮儀作法の一つと考へ、自分等も使ひ、學生たちにも使はせるやうにするのであらうが、こんなイヤな、時勢おくれの「お上品趣味」は一日も早く止めた方がいい。

學校ばかりでなく、山の手趣味の家庭では、さしたる大家でもないのに、妻が夫に、子が親たちに、女中が主人に、「遊ばせ言葉」を使つてゐるのを屢々見受けるが、これなぞは最も不愉快である。不愉快以上に滑稽であり哀れな氣持ちがすることさへある。

教養のある女性の言葉は優雅であつて欲しいものだが、同時にもつとのんびりと、自由に、快活にありたいと思ふ。

2. 『女性の自覺』何物ぞ

輕率に騒ぎ立てることを戒む』

「サンデー毎日」昭和七年十二月十一日号

「サンデー毎日」では、昭和四年八月十一日号から、「誌上裁判」というシリーズを連載していて、昭和四年八月十八日号の「誌上裁判」第二回「カフェーは撲滅すべきか」にも、谷崎は「陪審員」として意見を述べている。ただし、これは記者との対談の形になっているので、今回、翻刻は見合せた。『女性の自覚』何物ぞ』は、同じ「誌上裁判」シリーズの一つ「結婚解消問題 裁かるゝ男性」の中の「偽らざる世評に聴く」という項の冒頭に掲載されたものである。この「結婚解消問題」というのは、新婚初夜に新郎が過去に性病に罹っていた事を告白した所、新婦が直ちに結婚を解消して、披露宴出席者に結婚解消の挨拶状を送った事が、ジャーナリズムに大きく取上げられて話題になった事件である。谷崎の他に、文学関係では、武者小路実篤・ささきふさ・千葉亀雄・倉田百三・柳原燁子・長谷川時雨・長谷川如是閑・直木三十五が、意見を寄せている。

『女性の自覚』何物ぞ

軽率に騒ぎ立てることを戒む

谷崎潤一郎

結婚初夜の出来事などその當事者以外には誰もわかるものではない。わからないのに門外からこれと批評するなんて大きな見當違ひではないか。私の身邊についても同様わからないで世間にさわがれたため甚だ迷惑したことが少くない。だから新婚當夜の夫婦だけが知つてゐる事件について知らない他人が批評することはさしひかへた方がよろしい。

◇

女の父が公表したのは相手方に迷惑をかけるといふことは考へてゐないで單純な通知狀により「娘は處女性を失つてゐないから良縁があつたらどこへでもゆく」と知人に知らせただけであるが、親のなさけが過ぎたため、世の男達は「そんなに冷靜な女性では……」

とおそれを抱くことになりはしないだらうか？

◇

「娘が投げた一石で世の男子達は少し品行をつましくむだらう」などと甘く男を考へるのは間違ひだ。男性はたゞ一つの話題を提供されたといふ程度であらう。もし勇敢な女性から結婚のために健康診断書を要求せられたら勇敢に出したらいいではないか。もし「病氣だから断る」といつたら「さうですか」とアツサリ手をひいたらよろしい。

◇

男（長岡學士）がもし性病を秘して無理に結婚しようとしたら本人に責任もあるが、男女間の問題をたゞそれだけで片づけるといふのは軽率ではないか。だから結婚當夜の様子を知らずに想像をたくましくすることは遠慮すべきである。

◇

女（静子さん）が投げた性病もしくは童貞を失つた男に對する婚約破棄のガツチリしたやり方は、弱き地位にある我國の女性に大きな衝激を與へ、女性の位置

を高めたわけで稱賛に價すると、よろこぶ人があつたら、少々物を知らなさ過ぎる。世の多くの女は今回の事件を、たゞ新聞紙上の出来ごととして間もなく忘れてしまふだらう。それを女性の自覺とか向上とかいつて騒ぐのは間違つてはゐるまいか？

◇

とにかく私は女の平素の行動も知らないし、男の性格も知らない、それに結婚當夜の出来事を知るよしもないのに、どちらが正しいか決めるわけにはゆかない。また世間の人もそんなに個人のやつたことを内容も知らないで是非してはならないと思ふ。

3. 歌（無題）

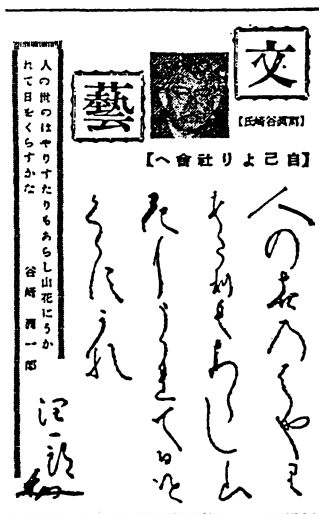
「読売新聞」昭和八年五月二十日朝刊(四)面「文芸」欄

谷崎の肉筆を写真版で載せたもの。この前後、「読売新聞」の「文芸」欄には、「自己より社会へ」という同じ題で、直木三十五・タゴール・長谷川如是閑・

菊池寛など著名人の肉筆写真が連載されていた。

この歌は、『春琴抄』執筆を兼ねて、この年四月に、松子と京都嵯峨近辺に遊んだ時の作と推定される。文壇や社会の動きに左右される事なく、我が道を行くという宣言をも含んだ、自信に溢れた歌である。花押は「順一」で、『盲目物語』の弥市を気取ったものである。

なお、谷崎の歌の隣には、偶々江戸川乱歩の随筆『探偵小説と瀉泄(上)』が掲載されていたので、乱歩の『探偵小説四十年』に言及がある。ちなみに乱歩は、昭和十年十二月の『幻影の城主』で、谷崎に「うばたまの夜のまぼろし夢ならば昼見し影を何といふらむ」という半切の歌を書いて貰って、床の間に掛けていと書いていた。『谷崎潤一郎家集』の歌「うば玉の夜の幻か夢ならば昼見るものを何といはまし」の原作か改作であろうか？



4. 『言葉』

「大阪毎日新聞」昭和九年三月八日(七)面「家庭と学芸」欄

文中に、引用された吉井勇の句は、喜多村緑樹(緑郎)・久保田傘雨(万太郎)共編の句楽会の句集『もずのこへ』の冬の部所収のもので、『定本吉井勇全集』第八卷「雑纂」の部に収録されている。マンボウは『細雪』下卷(九)に出て来る。谷崎は、『卍』執筆当

時から、関西の言葉に関心を抱いていた訳だが、松子との関係が深まるにつれて、日々の生活の中で、言葉の違いに注意する事も多くなつて行つたのであろう。就中、最後の所で魚の違いを言っているのは、谷崎が美食家であるせいもあるが、この頃、佐助の様に下男として松子に仕えようとしていた事から、この方面に谷崎の注意が向いたのではないか、とも考えられる。

言 葉

岩 崎 氏 へ

ケツタイ、エゲツナイ、ヤ、コシイ等の關西語がだん／＼東京にも輸入され、一般に使用されないまでも意味だけは理解されるやうになつた今日、もはや互に通じない言葉などはないやうに思はれるが、案外さうでなく、日常茶飯の簡單なことで、とき／＼私に此方の人の云ふことが分らない場合がある。又私の言葉

が此方の人に通じないこともある。或る時私は、「彼奴は薪ザツポウのやうな奴だ」と云つたら、薪ザツポウとは何のことかと聞かれた。東京ではカタヅケルことをカtasともいふ。だが此方では云はないと見て、カtasと云つたら訝しまれた。今、東京で通じない京阪の言葉を思ひ出すまゝに二三拾つてみる。

ドウラク——道楽と云つたら、東京では放蕩の意味か、本業以外の余技の意味に解する。大阪でもさう云ふ意味があることはあるが、しかし「ドウラクな」と云ふ風に形容詞的に使ふと、ゾンザイなとか、ダランのなとか云ふ意味になる。これは東京人には絶対に通じない。ところで、東京にゾロツペイと云ふ言葉がある、これが大阪のドウラクに完全にあてはまる。土地を異にする二個の方言がびつたり該當する稀な例の一つである。そしてドウラクが東京人に通じない如く、ゾロツペイも亦大阪人には通じないであらう。尙ついでながら、大阪では放蕩の意味の道楽には極道と云ふ語を使ふのが普通のやうだが、これは東京にも通じる。吉井勇の句に曰く、「極道に生れて河豚のうまさ

かな」と。

ジュンサイ——これはどう書くのか、植物の蓴菜の字を當てるのか、よく知らない。好い加減とか出鱈目とか云ふ意味らしい。ドウラクの方は語源が分るが、この語は何に由來するのか、私には見當が付かない。以上二つとも、私は實に最近に至つて使用法を知つたのである。

トウライ——人により所によつてトウライとも云ふ。「今日はトウライ寒うござります」などと挨拶されるので、早くから此の語は耳についてゐたが、どう云ふ字を當てるのか、ジュンサイよりも更に分らない。甚だとか、非常にとか云ふ意味であらうと推量される。

ホタエル——犬や猫がジャレル時に使ふ動詞である。これは萬葉の歌などにもあるから、由來の遠い古語であることは確かだが、東京では全く聞かない。

オンビキ——ヒキガエル、もしくはガマのことである。大阪人はオンビキのんに力を入れて、「ウー」と鼻の奥で呻るやうに發音する。東京人には中々むづかし

くて眞似がしにくい。

ヒロウス——ガンモドキの義である。大阪でガンモドキと云へば知つてゐる人がないでもないが、東京でヒロウスは全く通じない。昔の料理の本にはヒレウスと書いてあつたやうに記憶する。

ジュクタンボ——これは大阪では聞いたことがないが、京都で使ふ。ヌカルミのことである。長崎でもジュクタンボと云ふから、關西一帯の方言であらうか。

マンブー——これも京都だが、田舎の方へ行くとマンブー或はマンボーと云ふ。トンネルの短かいやうなもの、つまりガードのやうな所を云ふので「マンブー越ゆるれば山科や」と云ふ唄さへあるとか。言海を見ると「Manpoo」と云ふ和蘭語だとある。さすれば矢張り長崎あたりから傳はつたのかも知れないが、京都附近にだけ残つてゐる外來語であるのが面白い。

その他、ハツ、ウラゼ、アブラメ、ハマチ、サゴシ、ヨコワ等魚類の名では東京に通じないものが澤山ある。それらは名が違つてゐる場合と、魚そのものがない場合とある。例を挙げたらまだ幾つもある筈

だが、今ちよつと思ひ出せないのが残念である。

5. 『身邊雑事』

「サンデー毎日」昭和十年六月十日夏季特別号第十四号第二十九号

この夏季特別号の実際の発売日は六月十日ではなく、吉井勇が昭和十年六月三日の「報知新聞」に掲載した『淡泊飯屋漫筆(3)』でこの文章に言及している事から、その少し前であると推定される。『谷崎潤一郎文庫月報9』の「伝記谷崎潤一郎」拾遺(五)で、野村尚吾氏は、『身邊雑事』は幽霊作品であると断じていたのだが、氏の見落しだった訳である。

この随筆は、松子と正式に結婚して間もない頃の谷崎の生活実態が窺われるという意味でも興味深い文章であるが、それ以上に、谷崎が、『これからは現代もので阪神地方の有閑階級を書きたい。』と言っている事が、注目に値する。これは、『細雪』の構想が、既

にこの頃から谷崎の内に芽生え始めていた事を示しているからである。(後述する「トリオ座談会」もこの問題に関連する。)この発言が、書き悩んだ末中絶に終わった『聞書抄』の苦勞話や前年二月二十四日に四十四歳で世を去った歴史小説作家直木三十五に対する賞賛とも羨望ともつかない言及と共にある事は、誠に意味深い。何故ならここからは、谷崎が、『聞書抄』の挫折を機会に、昭和二年の『顕現』以来、『乱菊物語』『盲目物語』『武州公秘話』と続けてきた歴史小説の試みに、一旦終止符を打とうと心に決めた事、しかし、なお歴史小説に未練を残していた事が分るからである。谷崎が、この後、十年あまり歴史小説を断念し、『細雪』の準備に入り、『細雪』完成後、すぐに『少将滋幹の母』で再び歴史小説に挑戦するという道筋が、既にこの一文の中に窺われるのである。

身邊 雜事

谷崎潤一郎

ちかごろ原稿を書くのがどうも心苦しい。深夜になると目がかすんで書くことも讀むこともだめになる。年をとつたせると、家庭の人になつたせるかも知れない。私の知つてゐる人で、ずゑぶん煩はしい家庭生活をなし、子供を愛しながら立派に創作をつゞける人が少くない、自分はこれまで家庭に慣れないせゐか、獨身で身軽だつたころは時間の考へなしに書けたが、結婚してからは食事だの、入浴だのといろ／＼習慣がちがつて來たため夜おそくまで創作に専念するような氣分が少くなつた。

このごろは執筆するのに早朝でなくてはいけない。むかしは夜おそくまで起きたかはりに朝十時より早く起きることはまれであつたが、いまは七時、おそくと八時までには必ず床をはなれる。これからはもつと

早く起きて仕事は朝のうちにすませたい。まづ午前中には原稿を書いてしまひ、午後は午睡をするとか、讀書をするとか、のんびりと自分の時間をたのしみたい。



ものを書くとき食事には用心する。むかしは脂つこいものが好きだつた、いまでも一週一度は食べるがさほどほしくない。ことに、ものを書くには美食してはいけない、だから食物に好き嫌ひは一切いはない。朝は味噌汁と漬物、晝食はぬきにして、あまり空腹だとトーストに林檎くらゐですませ、夕食だけは自分の好きなものをゆつくり食べる。それも、べつに注文はない、家内のつくつたもので満足してゐる。酒は自分だけでは飲まないが人といつしよなら多少飲む。上山草人あたりと會つたら三合くらゐ飲む。草人は酒好きだが細君がやかましくて飲ませてくれないので二合くらゐ飲む。そこで二人で五合くらゐといふことになる。べつにお肴の心配もなく、ありあはせのもので話しながら飲むのが二人にとつてはたのしいことである。

最近の創作は時代ものを書いてゐたので、資料を調べたり、書き方に苦勞をしたが、これからは現代もので阪神地方の有閑階級を書きたい。用語などは落語で研究したり家庭でも大阪語ばかりで十分わかかつてゐるから樂である。

新聞で「聞書抄」を連載してゐた時には、どうも家庭にゐると書けないのでほかに家を借りて書いた。ゆきつまると氣分をかへるために轉地したらよいけれど、時代ものはあまり資料がかさ高いので旅へ出るわけにはゆかないので困る。なんとかして局面を打開したいと思つて横濱市鶴見に住んでゐる上山草人の家に行つた。その時はなるべく書物を持つてゆくまいと思つたが、それでも、驛員は書物の多いのにびつくりしたほどだ。そんなに苦勞してきて行つて見るとやつぱり書けずじまひで大阪へ歸つて來た。時代ものはかうした苦勞があるから苦しい。そこへなると直木三十五氏などは、いくら大衆文藝だと銘うつても、新聞や雑誌に三つも四つも書いてゐたのだから偉い、年齢の加

減かいまの自分には想像もつかないことである。創作に専心してゐると手紙一本も書きたくない、といつて必要な手紙は書かねばならぬ、そんな場合は閉口する。

面會を申込むのに「五分で結構です」といふ人があつた。用事は五分でも、面會前後の印象など、ながく頭にこびりついてゐるから結局はざるぶん時間のむだをする。そこで執筆中にはなるべく面會をしないことにきめてゐる。「一枚でもよろしいからぜひ執筆していただきたい……」と頼まれるが、自分にとつては一枚書くのも十枚書くのも同じような苦心である。創作する時には、こんな煩はしいことからなるべく遠ざかりたい、と思ふ。

新聞でも雑誌でも、原稿がおくれるので催促されるのには苦しむ。ことに坐りこまれて、火のつくようにやられると、なんだか嫌な氣持になつて筆はずまな。といつて原稿が遅れてゐるのに捨てておかれ、な

んの音沙汰のないのも薄氣味が悪いものである。

自分の知つてゐる人で中央公論の瀧田樗陰氏などは實に原稿請求の達人であつた。人力車でやつて来る、家に入つても座敷に通るわけでもなく、ちよつと聲だけかけておいて歸つてしまつた。すると私は妙にすらくくと原稿が書けた。瀧田氏の書かせ上手は原稿だけではなかつたらしい。夏目漱石先生のところへ揮毫を頼みに行くと、傍にすわり、たんねんに墨をすりながら雑談する。夏目さんはどうしても書かねばならないようになつて、何枚でも瀧田氏のいふ通りに書いたさうである。

なんでもないようだが、原稿を集めたり、物を書かせたりするにはこつがあるものである。圖々しいところがなく、たゞなんとなく氣分をひきたててくれる人に遇つたらかへつて原稿はよく書ける。つまり人徳によるのだらうと思ふ。

【終】

6. 『近畿景觀』と私

「大阪毎日新聞」昭和十一年四月二十一日(十三)面「読書」欄

北尾鎌之助の著書『近畿景觀第六編近江山城』(創元社 昭和十一年三月十五日発行)の紹介宣伝文である。以前、永榮啓伸氏が『谷崎潤一郎―資料と動向』の中で紹介された推薦文は、この文章を縮めたもので、『近畿景觀第七編丹波但馬』(昭和十四年十二月発行)と『同第八編若狭紀行』(昭和十五年十月発行)の他、『同第二編大和河内』の改訂版『聖蹟大和』(昭和十五年二月発行)や『同第五編京都散歩』の改訂版『新京都散歩』(昭和十五年十一月)などにも載せられている。

北尾鎌之助と言へば、昭和十二年十二月に、創元社から刊行された「潤一郎六部集」の『吉野葛』で写真を担当している事が思い出される。興味深い事に、谷

崎がここで紹介している『近畿景観第六編近江山城』の「竹生島」の章には、宝殿寺の宝物館にある静御前の「初音の鼓」に関連して、『同じやうな「初音の鼓」は吉野の菜摘の里の大谷家にもあつた。鼓胴の方は、谷崎潤一郎氏から小説「吉野葛」の写真のことを頼まれて、最近に吉野へ行つて同じものをみて来たので非常に興味を惹いた。』という一節がある。北尾鎌之助が竹生島を訪問したのは、同書同章によれば、十一月の事であるから、昭和十年の秋に、『吉野葛』の写真を撮りに行つたと推定できる。即ち、六部集の企画、或いは少なくとも写真入りの『吉野葛』を出版するという計画は、昭和十年夏までに出来ていた事が分るのである。谷崎が、珍しく他人の本の提灯持ちを引き受けたのも、版元の創元社、著者の北尾鎌之助が、共に六部集の出版に関わっていたからである。

ちなみに、この『第六編近江山城』巻末の「創元社出版書目抄」には、『潤一郎六部集』の広告も出ていて、『蓼食ふ虫』、『盲目物語』、『吉野葛』、『武州公秘話』、『春琴抄』、『聞書抄』、右六種の傑作を谷崎氏自ら選し、各篇

一冊として一流画家の挿画を加へ、著者自筆の和歌を添へて、傑作を永久に留む可き豪華版』と説明されている。もっとも、谷崎の和歌は結局添えられず、出版も、『蓼食ふ虫』が小出栖重の挿絵で昭和十一年六月に、『盲目物語』が安田鞆彦の挿絵で昭和十二年二月に、『吉野葛』が樋口富麻呂の挿絵、北尾鎌之助の写真入りで同年十二月に出た後、恐らく『武州公秘話』が完成できない為もあつて中断し、昭和十八年十二月に至つて、『聞書抄』を挿絵もなく普及版にして出した際に、時局に鑑みて六部集は中止する旨を宣言して終つた。

『近畿景観』と私は、谷崎が自らの文学と風土の関係を告白したものと見て、短文ながら、大いに注目し値するものである。何故なら、本文中に言及された『蘆刈』『盲目物語』『聞書抄』『卍』『蓼喰ふ虫』に加えて、『顕現』『乱菊物語』『吉野葛』『春琴抄』『猫と庄造と二人のをんな』、それにこの後書かれる『細雪』『少将滋幹の母』なども含めて、関西移住後の谷崎の作品の多くは、関西各地の風土を巧みに利用する事

で、事実、成功を収めているからである。

恐らく、大正十四年に『友田と松永の話』を構想し始めて以来、関西の風土をモチーフとした創作への野心は、常に谷崎の念頭から離れなかったのであろう。だから谷崎は、『饒舌録』第一回（改造）昭和二年二月号）で、中里介山の『大菩薩峠』を取上げた時にも、《京都から大和紀州地方を舞台にしたあたり、——特に「清姫の帯」のくだりなど、折角いゝ背景を使ひながら、もう少し繊細に書いてくれたらばと、聊か惜しいやうな気がする。》と語っていたのである。

谷崎は、この他にも、実際には書かず終ったが、風土を活かした作品の構想を幾つか持っていたらしい。例えば、昭和六年八月十日付け嶋中雄作宛書簡の中で、谷崎は、△をぐり」と云ふ百枚前後の物を計画中です、これは小栗判官の事を書くつもりで秋になったら熊野地方へ行つて実地を調べてから取りかゝります（水上勉『谷崎先生の書簡』所収）と語っているし、平山城児氏の『考証『吉野葛』』所収「樋口富麻呂の談話」によれば、谷崎は、「清姫」のことを書くこと

言つて、長い間構想を練っていたと言う。松子夫人の「桜襲」（倚松庵の夢）所収）によれば、谷崎は昭和六年春に道成寺へ花見に行っているから、「清姫」を書く考えはこの頃からあったのであろう。『大菩薩峠』の「清姫の帯」のくだりを惜しんでいた事も思い合はされる。「をぐり」と「清姫」は、共に有名な伝説に取材しようとして失敗した作品であるが、『乱菊物語』も後編で、「播州皿屋敷」のお菊を出そうとして失敗した。（注 この点については、平成三年十月二十五日の日本近代文学会秋季大会で、『谷崎潤一郎』『乱菊物語』の典拠について」と題して口頭発表した。）『吉野葛』によれば、吉野の自天王の伝説に取材した小説も失敗に終わっている。昭和六年前後を中心に、谷崎が風土と密着した伝説を作中に取り込む事にいかに熱心であったかが分ると共に、既成の伝説を取入れる事の困難から、それらの殆どが失敗に終わった経緯もまた、これらの事実から分るのである。

なお、話は余談にわたるが、谷崎の死後に残された創作メモに出てくる「ミゾロチ・ミ子」という名は、美

女に変じたみぞろが池の大蛇（〓魑魅魍魎）と契る小栗判官のエピソードに、また「三条」姓は小栗の父三条の大臣兼家に、「甘栗」姓は小栗に基づくものと思われる。また、同じメモに出る「尾形」姓の登場人物たちは、『延慶本平家物語』に「念背に蛇の形ありけり、これによりて姓をば尾方とぞ申しける」と書かれた大蛇の神裔緒方三郎の伝承を念頭に置いて構想されたものであろう。この創作メモに、關伽子・水分・真名井・采女など、水と関係する名前が散見する事をも併せて考えると、この作品は、谷崎の他の作品にもしばしば登場する、水と蛇と女を重要なモチーフとするものとなる筈だったように思われる。

なお、小栗と尾形という人名の組み合わせは、『日本に於けるクリツプン事件』にも見られ、谷崎の小栗判官への関心が、大正末期にまで遡れる事を示唆するものと考えられる。勿論、推測の域は出ないが、谷崎の小栗判官への関心は、『日本に於けるクリツプン事件』から死までの四十年間、意外に根強く生き続けていたと考えられるのである。

『近畿景觀』と私

谷 崎 潤 一 郎

○ 私は旅行は好きな方だがしかしあんまり遠走りをする事は好かない。絶えず未見の土地を求めて、まねばなく方々を見て廻るといふことも、一つの方法ではあるけれども、私はそれよりも、一ぺん氣に入つた土地が出来たら、その同じ土地へ何度も行つてみて、そのたびごとに、そこから何か新しい發見をすることを楽しむ。つまり「廣く、淺く」よりも「狭く、委しく」味はふ方の旅を喜ぶ。

そんなら私の「氣に入つた土地」とは何處かといふと、大體において近畿地方から中國地方——わけても西は播州あたりから東は江州あたりまで、——恐らく日本の風景のうちでも最も日本的なるもの、最も古典に屬するもの——それが甚だ私の詩魂を動か

すのである。従つて私は、その他の地方にはめつたに興味も覺えないし、行つてみようとも思はない。私はとき／＼用事のために東京まで行くけれど、あれから東は、青森まで一度、仙台まで一度、行つたことがあるきりで、北海道へは渡つたことがない。西も、別府と長崎とを知つてゐるだけで、他の九州の市邑は何處も知らない。富士やアルプスの山々にも、一つも登らないのである。

○

ところで、北尾さんの「近畿景觀」であるが、この書はさういふ私に取つて、實に打つて附けの好著なのである。なぜかといつて、この書の著者は、私の大好きな近畿地方を、やはり私のような流義で——一つのところへ何度も何度も足を運ぶといふやり方で——しかも私などよりは遙かに丹念に、精密に——踏査し、低徊し、懐古し、詠嘆し、觀察し、描寫してゐるからである。風景に對する北尾さんの注意がよく行届いてゐる一例を擧げるなら、今度出た第六篇近江山城の卷の「石山と瀬田川」の項において、北尾さんは瀬田の

唐橋の景色を見るには夏の夕ぐれがいゝといひ「瀬田の夕照」とは夏の日没時の美觀のことだと委しく説いてゐるが

瀬田の唐橋についてすら、随分細密な觀察を遂げ、その古典的な景觀に近代性を與へてゐる。これはたゞにこの一部分ばかりではない、この書の全體が、すべてかういふ近代味と懐古味と科學的精緻と文學的潤澤との、微妙な組み合わせをもつて成り立つてゐると云へる。そしてかう云ふ書き方の故に、此の書は紀行文學にして名所案内や史蹟案内をかねることになり、旅に出ようとする者にはよき參考書の役を勤めるが、旅がしたくて出来ない者にも、絶好の伴侶となるのである。

○

北尾さんは有數なる旅行家であると同時に、有名な寫眞藝術家であり、常にカメラを携帶してゐるところから、いかなる天地の物象に對しても、光の効果といふことを寸時も忘れない。今の瀬田の唐橋における斜陽にしても、實にさういふ心がけから來た觀察の

結果であつて、それがまた、この書の一つの特長を成してゐるのである。たとへば、巻頭の「湖國早春」の叙景を見ると、著者は絶えず敏感な注意を氣象の變化に向け水や、空や、雲や、雪や、霧や、日光やが、時々刻々に湖面の相貌を推移させる有様を、鮮やかに寫し取つてゐるのであるが、著者のような寫眞藝術家でなければ、なか／＼あゝまででは行きかねると思ふ。さうしてさういふ著者の長所は、たま／＼近江といふような水郷の風物を對象とする場合に、頗る活躍するのである。

○

余談ながら、歴史に、文學に、地理に、美術に、甚だ趣味の廣汎な著者は、私の小説の愛讀者でもあると見えて、芦刈や、盲目物語や、聞書抄等のことを、それに關係のある土地々々の項で言反してをられるが、正直のところ、私があればらの作品を書いたのは、矢張あゝいふ土地に對する愛着が、一つの重要な力となつてゐたと思ふ。たとへば私は、もし淀君が小谷で生れて、淀の城の主となり、大阪で死ん

だのでなかつたら、また三成が伊吹山の麓で生れて、佐和山の城主となり、加茂の河原で首を刎ねられたのでなかつたら、恐らくこの二人の美女や英雄にあれほどの興味を抱かなかつたかも知れない。また巨椋池や、大淀の流れや、水無瀬の風光にあくがれを持つてゐなかつたら、お遊さんのような女の幻影も、大和物語の連想も、浮かんで來なかつたに違ひない。そんな次第で、近畿地方に對する私の執拗な偏愛は、歴史物は勿論のこと、「まんじ」や「蓼喰ふ虫」以後の現代物の舞台にまで影響を及ぼしてゐるのである。——「近畿景觀」本社寫眞部長北尾鎌之助氏著、四六版四二〇ページ、寫眞廿八葉入、定價二円、大阪西區報上通創元社

7. 無題 (談話)

(イ) 「大阪毎日新聞」昭和十二年六月二十二日 (十一) 面

《谷崎氏談 谷崎潤一郎氏を阪神沿線住吉村反高林の

自宅を訪ねると語る」という前書きがある。

新たに創設される事になった帝國芸術院の会員に推挙されて、断つた際の談話である。松子夫人の『主おもむろに語るの記』（「中央公論」昭和五十六年六月号）によると、十八日に推薦の電報を受け取り、即日辞退の電報を打った。断つたのは、各方面の交際が煩くなるのを嫌った事や、詳しい説明もなく、電報で即日返答を迫った文部省側の礼を失した遣り方に腹を立てた事などが主な理由であったが、政府の思想統制や御用文学者の扱いを受ける事も懸念したようである。談話は、二十一日夜、自宅を訪ねてきた「大阪毎日新聞」記者に語ったものである。

主旨は大變結構と思つてゐるが待遇報酬の點などが何ら具體的にわからぬのに去る十八日突然「貴下を帝國藝術院會員に御推舉致したし、是非御承諾願ひたし、折返し本日中に御返事を乞ふ、文部次官」との電報を受けたが何だか人を馬鹿にしたような仕打ちだと憤慨

して早速断つたわけです、僕は大阪にゐる關係上、度々東京へ引出されるようなことがあつては困るし、全然内容も知らさず地方長官の異動のような電文をよこして實は腹を立ててゐるような次第です

(ロ) 「東京朝日新聞」昭和十二年六月二十三日(十一)面

《谷崎氏受諾の弁》という見出しと、《大阪電話》芸術院入を受諾した谷崎潤一郎氏は阪神沿線住吉村反高林の自宅で語る」という前書きがある。

一旦は拒絶した芸術院入りを、翻意受諾した際の談話である。松子夫人の『主おもむろに語るの記』によれば、谷崎はこの時、友人に泣き落されてとうとう「受諾した」と松子に語つたという。談話は、二十二日午後、自宅を訪ねてきた「大阪朝日新聞」記者に語つたもので、「大阪朝日新聞」二十三日朝刊(十五)面にも掲載されたが、何故か途中を省略してあるので、「東京朝日新聞」の方を取つた。

文部省から藝術院に入れといふ交渉を藪から棒に電報

一本で云つて来た大體藝術院はどんなものか判らないのにまるで私に命令でもするやうな禮を失した官僚的態度に憤慨して一應拒絶したので、所が二十二日學校時代同窓の友人大岡文部省監修官が來られて藝術院の目的や内容について詳しく説明され入會を懇請されたので、それならばと快く受諾することにしました、元來私は人前に出て喋べるのが嫌ひな方で仕事の都合上度々東京に出て行くのも迷惑だと思つて居ましたが大岡君の話では最初顔つなぎさへして置けばさう度々會合に顔を出す必要もないさうだし仕事といつても文部省の諮問に答へたり何か藝術院賞候補者の詮衡に當ればそれでよいまあ私を表彰する意味で入會させるのださうです

「中央公論」昭和三十年一月号グラビア
「七十の年輪 中央公論と同じ年に生れた谷崎潤一郎氏」と題したグラビアの中に、無題で載つたものが、文末に（潺湲亭主人しるす）とある事から、谷崎の文章と推定される。谷崎は、結局この二年後、昭和三十一年十二月八日に潺湲亭を引払う訳だが、やはり京都の冬の寒さが、その最大の原因だつたと思われる。

「巴里は佛蘭西なり」——ラ・フランス・エ・パリ。——と云ふ言葉が彼の國にはあるさうである。又「佛蘭西は歐羅巴人の故郷である」とも云ふさうである。それと同様の意味で「北京は亞細亞人の故郷である」とは、ちよつと云ひにくいやうだけれども、「京都は日本人の故郷である」とは云へさうな氣がする。が、今年も私は此の寫真を撮ると問もなく、愛する古都に別

れを告げて南國に寒を避けに行かねばならない。京都の土地がもう少し暖かできへあつてくれたら何を好んで故園を捨てて行かうぞと、自分は冬が来る毎にさう思ふ。而も醫師は、氣候に馴れない東京生れの者が、六十を過ぎてから此の土地で冬を過すのは止めた方がよい、今後は熱海にゐる時を一日でも多く、京都にゐる時を一日でも少くするやうにと云ふのである。

(潺湲亭主人しるす)

9. 『私の言葉』(談話)

「週刊新潮」昭和三十三年一月六日増大号(創刊百号記念)

記者の三つの質問に対する谷崎の談話である。日劇ミュージック・ホールで観た“ゲイ・ボーイ”や人工衛星などへの言及があり、年老いてなお、新しいものへの関心を失わなかった谷崎の面目が窺われる。ゲイへの関心は、後の『瘋癲老人日記』に於ける若山千鳥

「若水美登里への言及などに通じるものとして注目される。ただし、昭和三十九年九月の『婦人公論』に掲載された若尾文子・岸田今日子との座談会「世のコンビ 女の秘密を語る」では、〈僕はゲイバーなんか好きじゃないんです。一べん行っていやになった。きれいだなという感じはちっともしなかった。〉と発言している事実も忘れてはならない。

私の言葉

谷崎潤一郎

(作家)

問 さっそくですが、正月三カ日はどうお過ごしです

？

お正月はネ、なんです、毎年いつも三カ日は、家にいて過ごします。ええ、雑煮は、東京の人間だけでなく、家族のものが関西だから、一日と三日が「関西風」で、あいだの二日だけを「東京風」にやる。ぼく自身

「関西風」の方が好きなんです、まア、東京への義理立てということもあるし、それに昔のこと、子ども時分のことを思いだすもんで、懐しいもんだからね。

客は、正月で、こんなところだから、かえってあんまりこないね。ただ、ここ四、五年くらい前からの習慣で、この下の岩波別荘に、暮れのうちから安倍能成君（学習院大学学長）が来ているし、水口園には津島寿一君（防衛庁長官）が療養に来て（両氏とも谷崎氏の一高時代の同窓）、元日から三カ日の中には、お互いあいさつの往復をする程度だね。あとは大して用はないわけだが、一年中「字を書け、字を書け」といわれて、恥ずかしくて仕方がないんだが、この機会に、よんどころないところだけ、歌を、書き初めのつもりで書きます。それと年賀状だね。近ごろは年賀状は暮れの中に書くらしいが、ぼくはこれがきらいでね、年賀状はやっぱり年の始めに書くから年賀状なんだからね。

問 東京を離れて、すでに三十年以上と、お聞きして
います、東京が懐しくありませんか、また、

最近の東京観は？

だんだん歳をとってくると、東京が懐しくはなるが、いまの東京は、昔の名残りが全くなくなってしまった。むしろ、こちら（熱海）に住んでいる人に昔の東京の名残りがあってね。この前、東京へ行ったとき、日劇ミュージック・ホールへ、「ゲイ・ボーイ」を見に行ったんだけど、さぞ気が悪いだろうと思っていたが、そうでもないね。わりに面白かったよ。ゲイ・バーの方はまだ行ったことないんだけどね、そのうち一べん行ってみようと思っている。女の客をとられているというじゃないか。……そういう具合だから、東京も懐しさとは別に、面白いことはたくさんあるね。

問 昭和三十三年も「人工衛星」で明けるわけですが、
「人工衛星第一号打上げ」のニュースのときは、
どんな印象を受けられましたか。

そういうことはあると思っていたからびつくりでもなかったが、まさか、生きているうちに見られるとは思わなかった。時期的に早く来たという感じ……もちろん関心はもってるし、記事もずいぶん読んだ。が、

なかなかむずかしいことが多くて、判らないことがあ
るんでね……とくに、「時間」のこと——アインシュ
タインの相対性原理がよく判らないよ、どうも。

10. 『自賛』（談話）

「朝日ジャーナル」昭和三十七年七月二十九日号

連載されていた「素顔」欄に、「不敵」と題する匿
名記事の後、谷崎の大写しの写真と重ねて、出てい
る。

自賛

僕の齡で足も目ももっと達者な人もあるだろう 僕
はまず書座で右手が利かなくなった 右脚も悪くて庭
を少し散歩する程度 梅雨のころはよけい手足の痛み
がひどくなる 目も悪くなり 本が読めなくて困って
いる

痛みを忘れるには 自分の小説を書くのが一番いい

ようだ（談）

谷崎潤一郎

※なお、今回翻刻は見合せたが、昭和二十三年九月の
雑誌「読物時事」に、渋沢秀雄・小島政二郎・高田保
との座談会「谷崎潤一郎をかこむ座談会 観る話・食
べる話」が掲載されている事を報告しておく。

また、昭和十年一月五日の「大阪毎日新聞」（十二）
面「家庭と学芸」欄には、日本画家西村五雲・地唄の
菊原琴治との鼎談「トリオ座談会」が掲載されてい
る。この鼎談は、昭和九年十二月二十四日に京都南禅
寺畔瓢亭で行われたものであるが、その中で、西村五
雲が「いつか画かうと思つてもついその暇がなくて手
がつけられないものが『あるか、と問うたのに対して、
谷崎が、《それは沢山ありますよ（中略） 中には一つ
のものに五六年もかゝらねばならぬものもありますか
らな》と答えているのが特に注目される。この時、谷
崎の念頭にあった《五六年もかゝる作品は、『源氏
物語』の翻訳か、後の『細雪』にあたる作品かのどち

らかと考えられるからである。しかも、この半年後に、先に紹介した『身辺雑事』（「サンデー毎日」昭和十年六月十日）で谷崎が、《これからは現代もので阪神地方の有閑階級を書きたい。》と言っている事と考え合わせる、『細雪』の構想は、昭和九年末に、既に漠然とながら、芽生え始めていたと考えた方が良いでしょう。思われるのである。昭和九年末と言えば、谷崎が『源氏物語』翻訳の準備に取掛かろうとしていた時であり、また昭和十年一月二十八日に、森田松子と打出の自宅で結婚式を挙げる直前でもある。憶測に過ぎないけれども、谷崎は、『源氏物語』の翻訳を引き受けた時点で既に、この翻訳で生計を立てながら、松子やその姉妹や阪神間の有閑夫人たちから、五六年がかりの大作『細雪』の材料を集めてやろうという目算を立てていたのではないだろうか。『源氏物語』の翻訳には、昭和十三年九月までかかっているのに、『細雪』は昭和十一年十一月から始まっていて、創作メモは、恐らく源氏翻訳と平行して書かれ続けていたと推定できるから、実は昭和十年頃から既に、『細雪』の元になる

創作メモが書かれ始めていたという可能性もなくはないのである。